

記者は「線」のどちら側にくるか

触れると痛い目に遭うが、触れないと、それが何なのかわからないもの。タブーという言葉から、そんなイメージが浮かぶ。どうすればタブーを明らかにで

本棚の整理術

さるのか？
川端幹人著『タブーの正体』(ちくま新書)が用いた方法は、比較。対象はメディアだ。同じ構図の事件でも、嫌疑をかけられた

当事者が誰かによって、マスコミの報道が激しかったり、ゆるかったり、まったく報道されなかつたりする。その差を生んでいる背景を探ることで、タブーを

あぶりだすという試みだ。皇室、同和団体、宗教団体、検察、財務省、広告会社、電力会社、芸能プロダクションなどにまつわるスキャンダルについて、実名をあげ、報道のありようを検証。事例がとも豊富だが、それもそのはず、著者は伝説的スキャンダル雑誌『噂の真相』(休刊)の副編



川端幹人
『タブーの正体』
マスコミが「あのこと」に
触れない理由
(ちくま新書/882円)

集長だった人。右翼に襲撃され、肋骨を骨折するなど自傷した経験もある。

屈強な精神の持ち主に見える著者だが、事件以後、「天皇制そのものに切り込もう」とすると、事件の記憶が蘇り、指先が固まってしまう」と率直に明かす。タブーが生まれる瞬間を身をもって体験したのだ。自分の弱さに向き合う覚悟があるから、ギリギリまでタブーに迫れるのかもしれない。

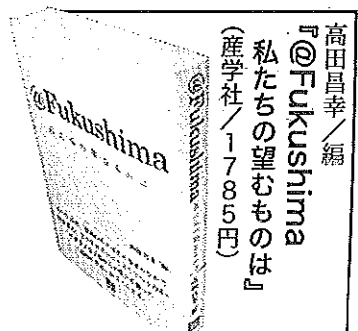
なぜ大手メディアは不正の追及に及び腰になつてしまふのか。日本のマスコミの構造問題が背景にあると、牧野洋著『官報複合体権力と一体化する新聞の大罪』(講談社/1680円)は指摘する。著者は元日経新聞記者。現在はカリフォルニアを拠点に活動するフリージャーナリストだ。

日本では内部告発者の実名がさらされる一方、官僚

など権力側は匿名で報じられることが多い。アメリカでは逆。マスコミは権力のチェック役なので、権力側を丸裸にし、弱い立場にある告発者を守るのが仕事だからだ。日本の新聞だけ見てもわからない日本の特殊性に気づかされる。

著者は若い頃、アメリカの大学院でジャーナリズムを学んだ。そのとき「政府ではなく納税者」「大企業ではなく消費者」「経営者ではなく労働者」「政治家ではなく有権者」の視点で取材するよう教え込まれた。それが衝撃だったという。日本では「権力に食い込むことこそ記者の王道」と指導されていたからだ。

権力側の情報があふれる中では、高田昌幸編『Fukushima』(産学社)のような本が異彩を放つかもしれない。ここには福島原発の被災者のナマの声が多く集められている。「福島」の地に帰る気はないです。帰れないです。も



高田昌幸/編
『Fukushima』
私たちの望むものは
(産学社/1785円)

う、裏切り者なんで」(北海道に移住した主婦)

「夏休みに三春のお盆祭に行つたとき、先輩とかと会えた。『東京の学校どう?』って聞かれて『楽しい』って答えたんだ。ほんとに楽しいくないけど、楽しい、って」(東京に転校した中学生)

「田んぼは凶作になると、コメが取れない。そういう年は国の失業対策事業の仕事で食いつないで。(略)そういう生活が消えていくんです。東電が来てから」(元大熊町長)

こういう言葉に接すると、「権力に食い込むことこそ記者の王道」という姿勢が空しく思える。

(緑 慎也)